

荏部直著

『光の領国 和辻哲郎』

(創文社 現代自由学芸叢書・一九九五年)

頼住 光子

本書は、西田幾多郎や九鬼周造とならんで近代日本の代表的な哲学者であり、さらに包括的な倫理学体系を構築した、現在のところ唯一の思想家である和辻哲郎（一八八九—一九六一）の思想について、その形成と展開を政治思想史の立場から解明せんと試みたものである。近年、冷戦構造崩壊後のナショナリズム激化という世界情勢の中で、戦前戦後を通じていわゆる日本文化論の強力な唱導者であり、西洋文化を貪欲に摂取しなおかつ西洋文化を相対化し日本文化の独自性と価値を宣揚した和辻に対して、文化相対主義の先駆者として関心が高まっている。また、個我から出発する近代思想の限界性が現代のさまざまな問題を生み出したという問題意識のもと、近代思想の枠組みそれ自体の見直しがいまに叫ばれている昨今、問柄を第一義的なものとし、要素還元主義を否定し関係主義を説いたポストモダニストという観点からも、和辻は高く評価されている。生誕百年を期した第二次の増補全集（『和辻哲郎全集 全二五巻、別巻二巻』岩波書店、一九九二年）が完結をみたこともあいまって、

和辻に対する研究や論評は内外を問わず盛んに行なわれている。しかし、そのような中であって、和辻の思想的形成と展開とを、彼自身の人生ならびに同時代の思想的状況の中でトータルなカタチで把握せんとする研究は意外に少ない。これまでのところ本格的なものとしては、湯浅泰雄氏の『和辻哲郎 近代日本哲学の運命』（ミネルヴァ書房、一九八一年。ちくま学芸文庫、筑摩書房、一九九五年）がわずかに挙げられただけであった。ここに書評を試みる荏部直氏の『光の領国 和辻哲郎』は、湯浅氏と同様に、思想形成・展開史の本格的な研究を志した力作である。湯浅氏が和辻の思想の根底に、和辻自身の出自である伝統的な農村の共同体的心情融合を見出し思想の収斂点としたのに対して、荏部氏は、〈光〉と〈形（フォルム）〉をキーワードとして和辻の思想の形成と展開をあつ付ける。以下、目次を示し、その概要を章ごとに紹介することとする。

序章 「土下座」をめぐる

第一章 生命・人格・象徴

1 〈光〉の原風景

2 「煩悶」青年の精神世界——世紀末文化と演劇体験

3 「Formの神秘」——象徴主義・人格主義・教養主義

第二章 古代日本とデモクラシーの発見

1 古代日本との出会い

2 デモクラシーの再現——民本主義論

3 「文明」を超えて

第三章 倫理学と政治

1 倫理学的体系の形成

- (1) 「人格より人間へ」／(2) 見出された〈日本〉／
- (3) 「人間の学」と時代情勢

2 和辻倫理学の構造

3 戦時体制と「思慮の政治」

終章 光と闇

「序章『土下座』をめぐって」においては、和辻自身の実体験をもとに一九二一年に発表された創作「土下座」の解釈を通じて、荻部氏の基本的な問題意識が提示される。郷里の農村で祖父の葬式に出席した主人公が土下座して会葬者たちに挨拶した際、土下座という〈形〉を取ることによって謙遜な気持となり、村人との密接な心の交流を感じたというこの作品については、和辻の日本的な心情融合の共同体への回帰を示すものとして解釈するのが一般的であろう。しかし、荻部氏は、意図的に作者の視点を離れて、心の交流は和辻の一方的な思い入れに基づくものではなかったかというユニークな読み直しを行なう。

そして、「主人公は、村人たちの眼を見ないまま、彼らとの現実上の『交通』を一切欠いたまま和合の実感に浸っているのではないか。ここで成立している〈共同体回帰〉は主人公の思考の閉域の内で展開されたドラマにすぎない。」(六頁)と指摘し、

重ねて、和辻をはじめいわゆる日本文化論者たちが宣揚する〈日本的なるもの〉についても、決してそれは〈日本的〉共同体において実体として存続してきたものではなくて、「過去のある時点で語り始められ、一定の歴史状況の中で紋切型として定着した」(八頁)ものであり、現在のわれわれにとつて思考の足枷となってしまうのではないかと指摘する。このような前提に立って、〈日本的なるもの〉がどのような必然性のもとで形成されたのかを、和辻に即して探究するという第一の課題が設定される。そして、第二の課題としては、和辻の〈形〉への回帰に着目し、一九三〇年代の全般的な思想状況としての〈形〉への回帰、そしてそれと連動する国家の復活とは何であったかが探究される。

「第1章 生命・人格・象徴」では、まず中学生の和辻が見た博覧会の燦然と輝くイルミネーションの〈光〉が、彼の思想的原風景となっているとの指摘がなされ、以下本書を通じて、〈光〉がさまざまな意味を重層させながら和辻の思想の形成と展開を支える原イメージとして用いられていく。中学生の和辻を驚嘆させた人工の〈光〉は、さらに、死を象徴する〈闇〉に對抗して人間の生存を支える生命の〈光〉であり、同時に西洋からもたらされる文化の〈光〉でもあると解釈される。

一高、東京帝大時代とそれに続く数年間の和辻は、教養主義に立ち西洋文化の〈光〉を追い求め、個性の発展により人格の〈光〉を輝かせるべく努めながら他方、当時流行していた耽美

的な世紀末芸術に魅せられ、死、狂気、エロスといった〈光〉の背後の〈闇〉の領域をテーマとして小説や戯曲を発表している。人格修養と官能への頹廢的な惑溺という対立する二傾向、すなわち〈光〉と〈闇〉との分裂の中で和辻の自我は引き裂かれ混乱する。その分裂の中で和辻は〈闇〉への傾斜を強め、とくに演劇に深く関わるようになる。この美的放蕩の時代は、人格主義への転向により長くは続かなかったが、この時期に和辻は重要な発見をする。それは、単なる写真よりも象徴的演技の方が有機的全体である〈生命〉をよりよく表現できるという「フオルムの神秘」の発見である。「象徴」にまで洗練された〈形（フォルム）〉を通じて、生命の〈光〉は人格の〈光〉となる。和辻にとつて〈形〉を磨き上げることが、自己の魂を磨き上げることであり、有機的生命は荒々しい生のエネルギーとして氾濫するのではなく彫琢された〈形〉を通じて発現する。ここにおいて和辻が発見した、単なる機械的な鋳型とは違う、〈光〉を宿した〈形〉は、後にその名を冠して和辻倫理学と呼ばれることになる倫理学体系の構想の要となるなど、以後の和辻の思想の歩みに大きな影響を与える。

「第2章 古代日本とデモクラシーの発見」では、第一章で分析された教養としての西洋文化の吸収に基づく人格主義が、いかに古代日本へと向かっていったかが探究される。一九一〇年代おわりから二〇年代のはじめにかけて、三十歳前後の和辻は、『古寺巡礼』『日本古代文化』等を発表し、古代日本への関

心を高めるが、荻部氏は、和辻の古代日本の発見について、それは、つねに自己に向上を強いる人格主義のもとたす内面的緊張の解ける「心やすらうユートピア」の発見であり、同時に人格主義の理想郷の発見でもあったと指摘する。和辻にとつての古代日本とは生命感の横溢するエキゾティックな〈光〉の世界であり、大和王権による統一も、インドや中国からもたらされた文化の〈光〉によって可能になったとされる。太陽の女神であるアマテラスを奉じる天皇は、黄金に輝く甲冑を身にまとい、外国から輸入した鏡をかざし、先進的な文化の〈光〉のもたらす権威によって他を文化的に制圧する。とくに重要なのは、〈光〉によって演出された儀式であつて、国家の主催する儀式に参加した古代民衆は、美的に陶醉し、〈フォルム〉の輝きを共有する。演劇的空間の夢の〈光〉によつて一体となり「昂揚感や美的陶醉のうちに国家を見て、自らを国民の一人として意識」した民衆は、古代の国民国家（和辻にとつては国民国家の原初形態）すなわち「文化の〈光〉におおわれた〈光の領国〉」（七三頁）の国民なのである。

和辻が古代文化論を発表した時期はデモクラシーの時代でもあったが、和辻は日本古代国家は、古代ギリシャのポリスと同様にデモクラシーの行なわれる文化国家であつたと主張する。古代神話の分析に基づいて、神意イコール民意であり、天皇は専制君主ではなくて全体意志の体现者であり、天皇家において民本主義の理想が保持されてきたとされるのである。さらにデ

モクラシーを通じて実現される理想国家においては、個人の自発性による共存と自己実現とが可能であるとされる。和辻にあって「社会秩序の本来の姿は、人々が情愛を発揮しあつて一体性を保つ融和的な共同体なのであり、デモクラシーはそれを現実化する手段」(一二四頁)とされたのである。ここにおいて、古代日本と古代ギリシャを範型とする和辻の人間、文化、政治をめぐる思想体系は一応の完結をみる。

「第3章 倫理学と政治」では、まず、前章で完結を遂げた思想体系が根底から揺らいだと指摘される。個人が教養を積み重ね内面的に向上することにより本来の共同性に達し得るという確信が崩れ、一九三〇年代に人格主義から「人間(＝間柄)」主義へ、個人中心から共同体中心へと和辻の思想が大きく転回したのである。その理由としては、コギトへの批判から出発する現象学や無我を説く仏教の研究と並んで、序章の「土下座」に示されたような共同体における伝統的な〈形〉とそれを保存してきた共同体の発見、さらに関東大震災時の人々の自然発生的な相互扶助性の発見が挙げられる。これらの体験を経て和辻は人間の共同体的存在に目覚め、実践的世界を発見するに至ったのである。その世界においては、個人は〈形〉すなわち役割を演じ切ることで全体性を担い公共的であり得る。間柄の倫理学は個人の内面を問題にせず、振る舞い方という外面に照準をあてた倫理学なのである。このような〈形〉の思想の主張は、一九三〇年代の思潮でもあった「国家」の復活と連動している。

個が無媒介に普遍に連なる大正教養主義にあつては、中間項の国家や民族は無視され伝統は軽視されたが、昭和初期の国家、民族の復活にともなつて、伝統そして伝統の日常実践的な現われである〈形〉への関心が高まったのである。和辻においても、国家は最高の公共性を担うものとして宣揚され、国家こそが、諸団体の維持発展と全体調和(正義の実現)を実現するものであるとされる。和辻は、重層化された巨大な演劇空間として国家秩序をイメージし、政治の本質とは正義を具体的状況において実現するための思慮(演劇舞台を総合的に設計すること)であると主張するにいたる。

さらに一年半のヨーロッパへの留学体験によつて和辻は、自らが日本人であることをいやおうなく自覚させられる。教養主義のコスモポリタニズムでは書物を通じて西洋文化を吸収しそれに同一化していたのであるが、実際に異国で生活をしてみてかえつて差異を感じ、そこに自らの内なる(日本的なもの)すなわち、数千年に渡つて変らない風土に基づいた生活様式に育まれてきた国民性なるものが「発見」され、(日本的なるもの)が維持発展される場としての国家が宣揚されたのである。

「終章 光と闇」で、荏部氏は、和辻倫理学が最終的に行き着いた調和的秩序としての理想的世界を(「光の領国」とよび、それはまさに戦後の日本社会を先取りしたものであるとしてその相貌を次のように叙述する。「現代的メディアが取り結ぶ情報空間において、人々は〈光〉の中に浮遊し、多種多様な社会

活動の花を咲かせることができる。この領域にのみ目をやる限り、生殺与奪を左右し死の〈闇〉をもたらず側面での政治の影はどこにもない。しかしこの朗らかな空間の背後には絶大な政治権力が潜んで全体を支えており、その発動を外から制御することはきわめて難しい」(一九三頁)。死の混沌の〈闇〉を直視することを回避することによって成立した、明るく透明な秩序空間は、深刻な矛盾や対立のない等質な空間でもある。(日本人的なもの)(として仮構されたもの)を共有することで均質化された人々は、その秩序の中で調和的生を営むが、その明るい秩序空間の奥には強大な権力が潜んでおり、一度それが暴威をふるうと人々はなすすべもない。氏は、政治がもはや人々が共に人間的に生きるための相互作用ではあり得ず、不透明な権力作用となってしまった二十世紀の状況のなかで、和辻が政治の意義を再確立しようとしたことは認めつつも、その努力はむしろ国家権力のソフトな抑圧を強化する秩序像を生み出してしまったと指摘するのである。

以上略述したように、本書は、耽美主義、教養・人格主義、間柄主義という和辻の思想的営為の変遷を、和辻の心理や経験という内的必然と時代状況という外的必然の両面からたどり説得的な議論を展開していく。また随所で示唆に富んだ興味深い指摘がなされる。とくに、古代研究段階で人格主義的体系が一応完成し、さらにそれを克服するかたちで間柄主義的体系が確立されるという体系の二段階成立説は独創的であり、思想の下

ラマとして生彩をはなっている。本書は、今後の和辻研究にとって必読文献となるであろうと思われるが、最後に評者の氣付いた点を二、三述べさせて頂く。

まず、議論のキーワードとなる〈光〉について、文化の〈光〉、人格の〈光〉、生命の〈光〉、〈愛〉の光、空なる〈光〉などと多義的な使われ方がされており、その多義性が和辻の思想の諸特徴を語るものであるが、反面、それゆえに〈光〉についてのトータルな理解が得にくい感がある。また、〈光〉と〈形〉との関係についても若干曖昧な印象を受けた。芸術においては〈形〉によって輝きを増した生命、人格の〈光〉が、役割としての〈形〉の倫理的実践においてなぜ「行為するはたらしの内に埋めこまれたもの」(一五八頁)になるのか、またその場合〈光〉は間柄的に連関しながら行為する当事者たちにとってどのような意味を持つのか、これらの点は和辻倫理学の根幹にも触れて来る問題であるだけにより踏み込んだ議論の期待されるところである。

さらに、〈光〉について、氏はそれは超越的、宗教的なものではないとされているが、晩年の『歌舞伎と操り浄瑠璃』の中で言及される、想像力によって作り上げられた世界の「超地上的な輝かしさ」(和辻哲郎全集第十六巻 岩波書店、三頁)は、どう理解すればよいのか。これは非日常的なものの超越的なものの帯びる〈光〉であり、その源泉として想像力は、共同体の〈外部〉への想像力であり、これこそが世界と他者を理解する虚焦

点として倫理学体系においても潜在的に導きの糸となっている、という方向で考えることは不可能であろうか。和辻倫理学というとその非宗教的、日常的性格を指摘するのが通説ではあるのだが、〈光〉のメタファーを使用することで、その通説を打破して、いわゆる宗教的ではないが、ある意味で宗教的な次元（その場合、荊部氏も論及している儀礼論、演技論が重要になってくるであろうが）を和辻倫理学の中に見出すことは無理であろうか。

また和辻が〈日本的なるもの〉を实体化しそれが思考の足枷となっているという指摘であるが、和辻の場合、印象批評的な通俗的日本文化論とは違って、現象学や解釈学の方法論に基づいて導出した人間存在における空間性と時間性の相即をおさえ、た上で、普遍的倫理の一発現形態として日本を取り上げるという基本的構えがあるのではないか。結局は〈日本的〉共同体擁護になってしまったという面はあるにせよ、和辻自身の普遍倫理学への志向は考慮されてもよいのではなからうか。さらに、〈日本的なるもの〉を实体化する日本文化論のイデオロギー性を批判する者自身のイデオロギー性はどのように相対化されるのか。それとも超越的批判が可能なのかどうか。以上は、荊部氏の著作に対する批評というよりもむしろ、氏の刺激的かつ示唆的な行論によって触発された、わたくし自身今後考えてみたい研究課題である。

近年、荊部氏をはじめとして、米谷匡史氏や福島揚氏ら若手の和辻研究者の活躍が目覚ましい。本書という貴重な成果を得て

さらに和辻研究全体が進展することを願うと同時に、氏の和辻研究が最終的な目的としていた、和辻が先取りして示した現代社会の中で、人々が共生し得る公共的空間について語る言葉が発見されることを期待する。「作家は処女作にむかつて成熟する」というが、本書においては必ずしも明示的ではなかった「現代の変容をへた、人間の活動や意識の現状に見あった形で政治を語る言葉」（四頁）は、今後の氏の研究の中で語られていくことであろう。

（お茶の水女子大学助教授）